

今日の話題

JR帯広駅から北東に歩いて15分ほど。小さな店が身を寄せ合うように並ぶ電信通り商店街の一角に「御用聞き屋べんぞう商店」はある。

2階の空きスペースが災害時には避難所になると聞いてのぞいてみた。約1000平方メートルあり改修工事の真っ最中だった。

一般の

人、お年寄り、障害者

べんぞう商店

害者が店頭
に立ち、仲
間がつくっ

がそれぞれ気遣いなしに泊まれるよう三つに区切る。収容人数

は20人余り。普段は防災講習会や地域の集会に使ってもらう。

毛布、アルミマットのほか、発電機や石油ストーブ、担架、簡易トイレまで備える。

辺りは高齢者が多く空き店舗や更地も目につく。店の経営も決して楽ではないのに商店街がなぜ避難所をつくるのか。

「地域に必要なだと思ってもうえなければ生き残れない」。商店街振興組合の長谷渉理事長は、お年寄りの安否確認や搬送態勢も検討していると言う。

障害者への配慮にもわけがある。組合加盟36店の中に障害を抱える人が働く店が三つあるのだ。店がほしいという願いに応え空き店舗を転用したそうだ。

べんぞう商店もその一つ。障害者が店頭
に立ち、仲
間がつくっ
たクッキーや野菜を販売している。

10年以上前、軒先や歩道を彩るために障害者施設で育てた花や苗を購入し、以来付き合いが年ごとに深まってきた。

避難所づくりには、東日本大震災がきっかけで出来た国の補助事業を活用した。あの震災から間もなく1年、開所式は3月10日の予定だ。(小野 秀司)